

第一部 水に溺るる死者と花に向かう生者

一章 ガストリエの聖流

1

すべての始まりは、きっと彼が死ぬ今日という日だろう。

そう内心でひどく冷たい声音が言った。私はそれに対してうなずきながら黙って、静かに逝こうとする彼の冷たく大きな手を握る。たこのできないすべらかなけれどごつごつと骨ばった彼の手。私の白い髪をくしゃくしゃにした温かかった、彼だけの手。

心の中で呟くうちにいつのまにか頬を何かが伝っていた。ぼろぼろとそれは私の意志とは関係なく零れ落ちる。わずかに熱い滴が彼の手に落ちるその様は、まるで水の形をしたたった一つの生命が、一瞬で奪われていくようだった。強く彼が握り返してくれることを望み、その細長い指を持つ手をすがりつくように握る。そうしていながら自分がこんなにも彼を、たった一人の兄を愛していたことを自覚する。どうして私はこうなのだろう。いつもすべては私の手から流れ落ちた後だ。自覚することが遅すぎる。そしてほら、今もまた。

「……兄様」

小さく呟く。数日間物を言わなかった私の声は、無理矢理吐き出されたかのようにかすれていた。喉がすれたように痛い。だけど私はまるで壊れたかのようにその呼び名を囁いた。何度も何度も飽きることなく。

「兄様」

人はみな、生きている中で叫びだしそうなほどの死を、絶望を抱えて生きている。いつか父が呟いた言葉だった。それが痛烈なほどに私の核心へと迫り、だから私はかすれた血の滲むような声を繰り返す。

「兄様」

分かっていて。納得していた。だけどそれは理解していたわけではなかった。許容できないような現実が目の前にあることを初めて知った。そして同時に、誰しもがそんな痛みを抱いて生きているということを、彼を喪った今、強烈に知覚した。

お願いだから、目を。目を開けて。その口でその声でその手で私を呼んで。

そう狂いだしそうなほどに叫ぶように想っても、泣き出しそうな引きつった声が彼を呼ぶだけで。

もう、彼に私の声が届かないことを知る。

「……兄様」

誰かが、いや、ウィルが私の肩を抱くその温かさが、余計彼の手の冷たさとの差を感じさせてびくりと震える。離さなければ、この手を。もう彼の手を離さなければいけないのに。そう頭の片隅で分かっているも私の手は彼にすぎるように離れることはなかった。ウィルの優しさに救われていたはずの私は、だけど今望むのは喪った彼の冷たい手だった。

「姫。……いえ、殿下」

ウィルの声が氷柱のように私を突き刺す。

止めて。そう呼ばないで。私は違う。私は違うのよ。

「一人に、して」

搾り出すような声が哀れだった。寝台の上の兄とその横に座る私を置いて、部屋にいた

人が音もなく去っていくのを感じる。最後まで私の肩を抱いていた彼は、一度だけ私の頬をかすめるように撫でて去っていった。生者が私だけになったところで死者との距離がひどく縮まったように感じる。死はこれほどまでに近く、いつでも私たちと接しながらそこにある。今にも笑い声がすぐ真横から聞こえてきそうなほどの。

兄の指は動かない。当たり前だ。彼はもうどこにもいない。

ゆつくりときつく握っていた手を離す。この手を離すことが決定的に何かを変えるだろうことを感じながら、そうっと壊れないように。彼の冷えていくその手を毛布の中にそっと仕舞い、眠るように死に逝く彼の顔を見つめる。そしてずっと胸に秘めていた言葉を告白する。

「兄様。私は、これから幾人もの人を殺すでしょう。私自らの手を赤く染め、セストを身に纏い名もない剣で赤を撒き散らす」

奇妙な独白だった。ただ淡々と事実を述べるように告げることはすべてこれからのもの。終わってしまった罪を懺悔するのではなく、未来に起こりえる罪を懺悔する。それは、けれど死者に対する冒瀆ともまた祈りとも思えるような告白だった。

「守ってもらっていた、私は、ロッセイは、あなたと共に朽ちる」

自分の半身を引き裂かれるような痛みと共に、ぼろりと透明な涙が私の頬を伝う。静かに吸い込まれるように、兄のその白い頬へと零れて落ちた。

必死に声をつむぐ。今、口にしなければそれは永遠にしこりとなって、自分を傷つけるだろうと思ったから。

「私はこれから皇女シャルロット・フィオラ・イチエリナ、「氷の姫」の仮面を被る。その仮面が鮮血によって赤く染まり息もできなくなるまで、永久に被り続けることを今朽ち逝くあなたに」

誓う。

私をすべてから守ってくれた優しいあなた。自分の寿命をも省みずただすべてを守り抜こうとした、私のたった一人の兄にしてイチエリナ国の守護者。自分の命すらも守れずに、けれどあなたは逝ってしまふ。何故生きようとしてくれなかったの、どうして死ぬことを許容するの、どうして私を守ろうとするの。

私は理解している子供だった。いつか義兄と叔母の二人を赤にまみれさせ、この国を導く王とならねばならないことをもうずっと幼いときから理解している子供だった。守ってもらう必要などなかったくらいに強い子供だった。

いいえ。

はつきりとした否定が心の中に浮かび上がり、首をかすかに横に振る。嘘だった。守ってもらわなければ何も理解できず、何も知覚することもなかった。彼がいたから、あなたがいたから。

「あなたは、私を守ってくれた」

弱い言葉。強いはずの私の口から零れるそれは、嗚咽にまみれた絶叫だった。叫んではいけない。これ以上泣いては。だけど一度堰を切った涙は止まらない。止まることなく頬を伝い、唇を横切りいつの間口に当てた手が声を押し殺す。

ずっとあなたに言いたくて伝えられなかった言葉がある。

「私を、守ってくれて、ありがとう」

ありがとう。
さよなら。

2

温かい手が私の頬を撫でてはっと目を開ける。目の前には翠の美しい双眸があり私はかすかに驚く。

「こんなところで眠ってはお体に障ります」

心配そうに彼は言いソファから身を起こす私の肩にやわらかいローブをかけてくれた。感謝しつつ、けれど身体は重い。ちらりと顔を上げて周りを見ると部屋には私と彼しかいなかった。安堵すると同時に涙が頬を伝う。

「殿、か」

「止めて」

鋭い声がウィルの声を遮った。そしてそれが自分の声だと知り絶望によく似た虚無を抱く。手で目を覆った。

「止めて。二人だけの時はそう呼ばないで」

これから私は公の場で幾度もそう呼ばれることになる。その度に傷をえぐっていては仕方がないけど、彼のその声でそれを呼ばれると血が溢れ出すようだった。その温かい生者の声で冷たい死者の傷に触れないで。

「……申し訳ありません」

差し出されたハンカチーフで目をそっと拭う。いつまでも泣いている暇はない。私もまた死に神の鎌で狩られるならば、やらなければいけないことを成し遂げねば。時間はあまりないのだ。

「……葬は。いつ行うの」

「シャルロット様が回復なされてから、とサルサ様から命じられました」

「そう。方法は」

「あなた様の思うとおりに、と」

その言葉に私は思わず自嘲めいた薄い笑みを浮かべた。

「彼は、優しいわね」

ウィルはけれどその言葉に不快そうに顔を歪めた。なんでもないと、軽く首を振って立ち上がる。長時間ずつとこの体勢のままだったから紺色のドレスには皺が寄っていた。それを直しながら窓をちらりと見ると、柔らかい朱色がイチエリナの空を染め上げその中でただ一つの黄色が、まるで星が火を噴いて落ちるようにゆっくりと沈む。

それから目を逸らし彼を振り返ると、黒の喪服をほんの少しよれた白いベッドに丁寧に置いているところだった。何も言わずに近寄りそつと黒いその柔らかな生地に触れる。十五歳になると同時に兄から送られたものだった。彼らしいジョークにそのときは随分と腹を立てたけれど、今は彼から送られて本当によかったと思えるから不思議だ。

「メアリを呼んで。着替えるわ」

続けて葬儀を執り行う前に、小食を出そうとしていたらしいウィルは驚いたように私を振り返り、心配そうな顔になった。

「何かお食事をとられたほうがよろしいです。朝から何もお食べになっていないでしょ

う？」

「いい」

いつものように切つて捨てるように言うと、彼は一度手を止めて私を不安そうな瞳で見つめた。その手に持っていたティーセットをそつと白い小さなテーブルに置いて、軽く礼をし部屋からするりと抜け出した。

それを最後まで目で追つてから椅子を引いて、彼が置いてくれた紅茶を淹れながら読みかけの本を手に取り、表紙を撫ぜる。

深い紅蓮に柔らかい琥珀色が文字を描く。何度ウィルとメアリと読んだか知れないほど、幼いときからの愛読書。自分でも、これを手に取るときは感傷を抱いているのだと理解しているのに、なかなかその癖を止めることはできなかった。

バルローナの鏡。

とある国にバルローナという鏡匠がいた。彼はある日突然街に住み着き、ほぼ食事や睡眠をとらず誰とも喋らないで、ただ淡々と飽きることなく美しい鏡を作る。街の人々は最初鏡しか作らず誰とも接することのない彼を気味悪がったが、彼が作った鏡を見て誰もが彼を褒め称えた。それはどんな鏡よりもはっきりと自分自身を見返してくるようで、恐ろしいのだけれど何度でも見たくなるような、そんな魅力を秘めていたからだ。

もともと芸術を好んだその街の人々は彼の鏡をこぞって買い求め、若者は弟子になることを望んだが、彼は鏡をあまり他者に譲ることはせず弟子をとることもなかった。鏡を譲らない彼に痺れを切らした強欲な貴族が、無理に彼の工房に押し入り鏡を奪い取ろうとする、彼は一つの大きな鏡を貴族に向けたという。そしてそこに映った自分の姿を見た貴族は、正気を失った。そんな定かでもない噂が流れ、人々は彼に対して確実な尊敬と畏怖を同時に抱かせた。

そんなある日、その国は他国と戦争を行うことになる。男手はみんな軍に徴収され、街に溢れていた金属はすべて鉄の弾丸へと姿を変えるために奪われた。もちろん人々は金属を奪われるという段階で鏡匠バルローナの姿を脳裏に思い浮かべ、そして不安に駆られて彼の住む小さな工房へと向かった。案の定バルローナはやってきた軍人に鏡を向けていた。

軍人は鏡を見て絶叫をあげ、まるで殺される寸前の牛のように哀れに逃げ惑った。けれど街の人々はその鏡を見ても恐怖するところが何一つない。そして鏡の後ろに珍しくそつと微笑む彼を見て、誰も動けなくなった。

彼の左目は鏡のような金属が埋まり、そしてその喉からは金属が飛び出していたからだ。もはや彼は死んでいたのだ。

何度読んでも彼の凄惨な死に様子が忘れられない。ただの伝承であるはずなのに、ひどくバルローナの人間らしさがどうしても伝説や伝承の類にしてしまうことを拒絶している気がする。人間らしさ。そんなものがどこにあるのだと兄やメアリは笑うけれど、私とウィルはそれを感じていた。なぜならバルローナが求めていたのは。

「シャルロット様」

いきなり上から明るい声が降ってきてはつとする。顔を上げるとそばかすの目立つ顔に優しい笑みを浮かべたメアリがいた。目を瞬かせながら頷き、自分の愚かさに小さく苛立つた。いつかこうして私は死ぬのかもしれない。ぼんやりと考え事にふけりあつてなく。

「またバルローナの鏡、読んでいらっしやったのですか。お好きですね」

彼女は私の手にある紅蓮の本をちらりと見ながら、喪服の下に着る薄いドレスの手入れをして私に立つように合図をし、背に当てるサイズのチェックに余念がない。

「また少しお痩せになりましたね……」

本をテーブルに置き紺色のドレスを脱ぐ。着慣れない薄いドレスをメアリに手伝ってもらいながら身に着けて、その上に兄から送られた喪服を着る。柔らかい手触りと包まれる冷たさに、ふと兄の冷たい指を思い出して、震えた。

「大丈夫ですか？」

心配そうに顔をうかがうように見られ、目を閉じながら首を振る。椅子に座るとメアリは、ウイルが持ってきてくれた紅茶を淹れなおして私の冷たい手にその温かい湯気のものぼるカップを持たせた。

「温まらないと。具合があまりよろしくなさそうですわ」

「いいのよ」

私は感情を言葉で伝えるのがひどく苦手だ。だから優しい感謝を述べられない。いつも言葉は立ち止まりつかえてそして私の中に還元される。もどかしいとは思う。それでも十数年一緒にいると、私の一見棘のあるような言葉や情けない一言から感情を読み取ってくれるから、私はウイルと彼女に甘えてしまうのだ。

私のそっけない一言に一度彼女は逡巡し、やがて仕方がないというように微笑んでこくりと頷いた。赤い癖のある巻き毛が優しく揺れる。私の後ろに回りきつく縛られた髪をそつと解き、丁寧な動作で梳く。カップを持たされた手がじわじわと温かくなって自分のはつきりと生者なのだと自覚させられる。

不思議だ。兄は私に死を教え、メアリは私に生を自覚させる。二人は私に対する姿勢が同じなのに私に与えるものは、すべてにおいて正反対だ。

ならば、ならばウイルはどうだろう。彼は私に何を与えるの、与えたの。

「さ、できました」

メアリは満足そうに笑って私の手からそつと紅茶のカップをとりテーブルの上に置いて、私を立たせて喪服の最後のチェックをする。どこの誰が死んだところで、きつとこういうところは変わらないのだろう、私が皇女である限り。それを望んでいるのか憎んでいるのか、自分のことなのに何一つ分からない。

人間らしさのかけらもない、どうしようもない皇女。

それが、私。

3

「氷の姫」。

国民が私のことをそう親しみを混ぜて呼んでくれているのは知っていた。もつとも彼らが言っているのは私の容姿のことだけで、けれどその呼び名は言いえて妙だと思う。白い雪のようなやわらかい髪、まるで部屋から出たことがないかのように病的に澄んだ肌、母譲りの海のように深い瞳。一般に国民に知られる第一皇女、シャルロット・フィオラ・イチェリナはそのように知られて、そして信じられていた。だから誰も私の本来の残酷性を、私の狂気を知ることはない。きつと生まれたときから一緒に、英雄イエラの願いを、鏡匠バルローナの望みを共感しあえたウイルさえも知らない。

私はそんなもの、本当はどうでもいいのだ。国民がどうなろうと誰が死のうと。

けれどそういつて放り出すにはあまりにもすべてが大きすぎた。兄が残した私へのすべて。慈しむべき国民、救うべき子等、組織だった軍隊、高度な技術、最後の二枚の切り札。放り出してもいいのだ。すべてを捨て去って誰からも憎まれながら首を斬られても。けれど私は恐ろしい。すべてを失って誰からも憎まれることになった私を、想像して嘲ってしまえる自分を自覚してしまうことを。そう、私は自分が、シャルロット・フィオラ・イチエリナという私の被った仮面が、憎まれることを望んでいた。

自分がそう望んでいることに気づいたとき、確かに私は何かを失くした。それはきっと兄を喪った今の空虚な穴よりも、より大きくて深い。死も生も望みも懺悔も祈りも罪も願いもすべてが混沌と化した穴が、私の中に巣食っている。

だから私は凍り付いていなければいけない。皇女、そして後に女王となっても未だ。

「少し、顔色も良くなりましたね。ウイルヘルムを呼んでまいります。少々お待ちください」

そう彼女は言い私を座らせて一礼してから部屋を出る。メアリの柔らかい赤毛が消えるのを眺めてふっと視線をずらす。私の部屋はおそらく皇女という立場の者の部屋にしては散らかっている。私があまり物を片付けるのが得意ではなく、また従者である前に一介の小貴族でしかないウイルが部屋を整えることなどできるわけもなく。必然的にメアリにその仕事任せられたような物なのだが、彼女も彼女で私の侍女としての役割が異常なほどに忙しい。半分は故意に仕事を任せているのだが。

立ち上がり隣接している武器庫の扉を開ける。真つ先に目に入るのは白い刀身だった。どこにも穢れのない清らかな剣。幾人もの命を奪ってきた私の心。この刀匠に造られたわけでもない一本の名もない剣は、だけれどこの十数年ずっと側にあった。穢れた清らかなそれ。目をつむりそつとその白い刃に指を這わせる。光らしい光のない武器庫の中で、刀身に触れる指が艶かしくゆるやかに這う。

この剣に触れるたびに彼女との字だけでの会話を思い出す。

(私たち王族は殺し方も、殺され方も知らなければいけない)

「本当に、ね」

小さく呟くと冷たい牢屋のような倉庫の中に、ぼんやりと響きこころが少し冷たいことに気づく。指を離して振り返るとウイルが感情の読めない表情で私をじっと見つめていた。その様子が、まるで行き場を失った子供のようで、愛しくて哀しくて私は彼に手を伸ばさず。自分から伸ばしているのに届かなければ良いと、するりと突き抜けてしまえば良いと思いつながら。

だけでももちろん彼は死者ではない。私の伸ばした指は、すり抜けることなく彼の頬にそつと触れた。冷たかったのか彼はびくりとその身を震わせ、それからどこか安堵したように、ずつと身に纏っていた刺々しい空気を霧散させた。彼の白い頬は私のように女として最上級の生活を送っている者のそれより、よほどきめ細かく柔らかい。けれどちゃんと男らしくほんの少し頬骨が上がっていた。幼いときから変わらない、彼。

変わらない、わけではない。いつからか彼は私を見下ろせるようになり、私の着替えを手伝うことを拒否するようになって、そして一緒に眠ることはなくなった。私もあなたも、大人になった。そう胸の中で呟くたびに、私の心はきしきしと、音を立てて軋む。

「ロッセイ」

彼はひどく優しく切なげな瞳で私を見つめながら、まるで今口にした言葉が宝石だともいうかのように大切に、死んだ私の名を呼んだ。ぴたり、と、彼の頬を撫でていた私の手は止まる。その名前を呼ばれていた私は、死んだのだ。

手をそつと下ろす。私にできる唯一の愛情表現は、けれども二度とできないだろうと覚悟しながら。彼は突然離れた手に目を見開いて私を困惑したような目で見つめ、私は首を振って彼の横を通り過ぎた。

「シャルロット、様」

情けない、今にも泣き出しそうな子供の声を上げて彼は、私を呼び戻そうとして、振り返らないと知ると、私の手首を優しく恋人を抱きすくめるようにそつと掴んで振り返らせる。翡翠のように優しい眼差しが、まっすぐに私に突き刺さり不意にどうしようもなく泣き出したくなった。あなたのその瞳。私には、あなたの底を見つけられない。こんなにも、こんなにもあなたを。

「放して、ウィル。無礼よ」

嗜めるような声が彼を打った。彼は何故かすがるように私を見、泣き出しそうに微笑んだあといつもの、ただの従者である彼に戻った。そうさせたのが自分だと分かっているながらも、泣き出しそうな私は変わらないままだった。

「申し訳ございません」

「葬は、何時から執り行いますか」

「もう他の者は準備ができていますので。夜になったら行わうわ」

「どのように」

王の葬式はたとえどれほど憎まれていようとも盛大で、そして美しい。脳裏に父の遺体が火となり灰となりそして骨になったことを思い浮かべ、けれど私の唇からは違う言葉が転がり落ちた。

「水葬」

「え」

「水葬が、いいわ」

母のように何かを成し遂げたわけでもなく、最期の最期まで生命の火花を散らして消えた父のようでもなく。兄はただ、流れる濁流に溺れていた。彼の白い頬が冷たい水に沈み、柔らかい栗色の髪が透明に浮かび上がる様を脳裏に浮かべる。彼は、きっと美しいだろう。

「水葬、ですわね」

「ええ。シクルグルの川に流しましょう。今日限りはあの川に立ち入ることを禁じて。漁師には私から手紙を出すわ」

「かしこまりました」

そう答えて私が首にネックレスをするのに手間取っているのを見かねて、彼は私の手からネックレスをとり丁寧に付けてくれた。そうしながらも、彼の戸惑いは隠しきれない。い。

「いいのよ、ウィル。水葬は白痴に対して行う葬式ではないわ。いつまでもそんなものに囚われないで。愚かよ」

水葬は、遙か昔からイチェリナ国に伝わる白痴に対する葬式として行われていた。羊水

のような流れにくるまれば、失ってしまった記憶や知識が蘇ると信じられ白痴の子供が生まれると、彼らはその子供が死んだとき川に流した。

「申し訳ございません」

「それに分かっているでしょう。兄様は白痴ではない」

「勿論です。ではサルサ様に伝えに参ります。メアリを呼びますか」

「いらないわ」

彼は一度頷いてさっと礼をして私室から姿を消した。それを見送った後、机の上に乗せたままの紅蓮の本を書棚に戻す。同時にノックの音が私しか存在しない空間に、空虚に響いた。

4

「どなた」

「シャルロット？」

その声に一瞬返すべき言葉を忘れる。けどすぐにそれを振り払って幾分か安堵を滲ませた声で返す。

「入ってくださって大丈夫ですよ、義兄様」

言い終わると同時に扉が開いて、銀に近い長髪を軽く首の後ろで結わいた、義理の兄、ベアード・トルス・イチエリナが入ってきた。理知的な濃い藍の瞳がまっすぐに私を凝視して、それは哀しげに歪んでいたが瞳にだけ浮かびあがり、表情はいつもと同じ優しげな笑顔だった。

「大丈夫、かな」

そういいながら私が差し出した右手の指先に、跪いて軽いキスをする。私はその優しい声にほんの少し和みながら答えた。

「心配して下さったのですか」

「勿論。ウイルヘルムは？」

「葬の方法を決めたのでサルサ老師に伝えるように使いに」

自然に葬、という言葉を口にした私に彼はわずかに驚いたように私を振り返る。そして寂しそうに笑った。

「もう、受け入れたのかい」

「受け入れなければ、進めません」

「何も前進だけが全てではない」

「……それは、そう、ですわね」

テンポの良くなり始めた会話が私のその言葉にすんと、落ちる。彼はそっと私を抱きしめて、頭を優しく撫ぜた。懐かしい感覚。私には二人も兄がいた。

「いつもの君なら、愚かな。そう言うのにな」

柔らかい声突き刺さる。いつもの君。いつもの私。それは、どこにいつてしまったの。

「義兄様は、私が傷つかないとでも思っているようですね」

しっとりとした声が声帯から漏れる。本当は今も泣き出しそうなのだ。けれど私が涙を見せることができるのは、彼ではない。

「そういうわけではないよ。ただ、君はいつも強くあろうと望むからね」

「強くなければ、王にはなれません」

「彼女は確かに強かった。だが、精神では弱い部分もあった」

「人は誰しもそれぞれの強弱を持つものでしょう。彼女は、王に相応しい。なぜなら彼女は強く在ったから」

「強くあれば王になれるとでも？」

「王を王たらしめるものは強さ、私はそう思いますわ。否、そう、思いたいのでしょうか」

「強さだけが王になる資格ではないと僕は思うけどね。君は強さに対して貪欲過ぎる。彼女、イエラは果たして本当に強かったのかな」

英雄、イエラ・イチェリナ。私の起源にして存在の証明になる過去の人物。歪んだ世界を造り上げようとした狂王を壊し、純粹なるその意思のまま今の世界の原型を造り上げた、たった一人のヒーローにして、ヒロイン。元はと言えば神官の娘で、そうあるにも関わらず農民や貴族と分け隔てなく接し、裸足で田の中に入り耕すのさえ手伝ったという純真すぎる彼女。

そんな彼女が、狂王を殺すに至るのにはどれほどの苦痛を伴ったのだろう。そしてそれに打ち負けることなく、最後までその純潔を貫いた痛みはどこに還元されたというのだろうか。

痛みを隠し通すことはできない。人は、例え英雄であろうと弱いものだから。

「彼女は、とても強かった。私は彼女の意志を受け継ぎたいのです、義兄様。それがどんな痛みを伴うことになろうとも、私は彼女のような純真なる光になりたい。だから私は強くあらねばならない」

「そういいながら、けれど私は小さく心の中で呟く。私の望む強さとは何を示しているのだろう。分からない、判らない、解らない。答えなど、存在すらしないのかもしれない。」

「それでも、君は泣いたね」

「すつと、ベアードは私の頬にその白く細長い指を這わせた。目は、確かに赤くなっていたのだろう。彼の濃い藍色がまつすぐに私を見つめていた。彼の底には何がある。それがふと、知りたくなって見透かすように瞳を見つめた。浮かび上がるのは、深い苦悶と、執着？」

彼は私の視線の思惑に気づいたのか、さりげなく目線を逸らし、同時に私をその腕から解放した。頬をなぞった指は代わりに私の頭を再度撫ぜ、柔らかく、笑う。

「光を望むなら、強くあるのと同時に弱くなければいけないよ。強さと弱さは同じものなのだから。お兄さんを喪ったことで泣くのは強さでも弱さでもない、痛みだよ。だから、泣くことは弱さではない。賢い君なら分かるよね」

「詭弁だ。そう応えようとして、それでも私の口からは何もこぼれなかった。その優しい詭弁に逃れることを今だけは、許されたい。それも、弱いことなのかもしれないけれど。」

「ええ、分かれます。でも、もう散々泣きました。これ以上泣くのは嫌ですわ」

「君というと彼はくすくすと可笑しげに笑った。」

「君らしい答えだね。そういうえば、彼の葬儀はどうするんだい」

「水葬にいたしました」

簡潔に応えると案の定彼は大きく目を見開いた。戸惑ったように声をつまらせ私をおろおろと見つめる。面白い人だ。

「けれど、それは白痴に対して行う葬だよ。分かっているのだよね？」

「義兄様。白痴に対して行う、だなんて誰が決めたのですか。そんなものは土地に染み付いた慣習です。それに、兄様は火にくべられて逝くよりも、水に流れて逝って欲しいのです」

静かに答える。きつと私は他の貴族に非難の目で見られるのだろうけれど、それでも私はこの意見を変える気はなかった。兄は火よりも水のほうが合う。

なんとなく彼も想像したのだろうか。ベアードは啞然と私を見たが、眉をひそめやがて納得したように頷いた。

「確かに、彼は火に焼かれるよりも水に溺れたほうが美しいだろうね」

私も答えるように頷いて、ほんの少しだけ微笑んだ。ぎこちない笑みになっているのを感じながら、それでも。

「サルサ先生もあまり文句はいわないだろう。レテイリア叔母は、……僕から言っておこうか」

「そうしてくださると助かりますわ」

「では先に彼女に会いに行くでしょう」

そういつて彼はまるで道化のように可笑しなお辞儀をし、振り返り扉に向かう。そして扉に手をかけて、私を一度振り返った。ふざけた仕草など一つもない、真剣で誠実な眼差しを私に投げかける。

「シャルロット。君に一つだけ忠告をしよう。何、ただの戯言だとしてくれて構わない。君は大切な者を喪った。それを、忘れてはいけないよ。僕や、彼女に全てを奪われたくないのなら」

濃い藍色の瞳は、私の後ろから指す夕陽によって奇妙な紫が生まれていた。それは、きつと彼の国、彼のトルスを示す色。

「勿論、解っています。あなたも、彼女も、誰も味方ではありえぬことくらい」

そう返す。それに、彼はひっそりと笑った。優しく冷たい笑みだった。

「そう、それで良いのだよ。君はそうあるべきだ。では、また後で」

今度こそ部屋を出ようと彼は扉を開けて、私は知らず微笑みながら、釘を刺しておくことにする。

「義兄様。酒池肉林もほどほどになさって下さいね」

濃厚な酒の香が移ってしまいそうだ。

5

私が老師に伝えた内容は、瞬く間に城中に知れ渡ることになった。それは勿論そうだろう。兄はこの国を護り抜いた王だ。静かで聡明で優しい王。国民という国民を必死に護り、本当に愛され慕われた尊い国王。そんな彼を、白痴と同じ葬式で送るというのだから、きつと私は憎まれる。

それでも。

「兄様、あなたなら、分かってくれますよね」

そう呟きながらそっと彼の白い頬を撫ぜた。もうすでに化粧師が来て死者としての化粧

が施された彼は、まるで蠟人形のように美しい。剥製にしてしまったかのようなだ。

兄を乗せる小さな木の船は重すぎず軽すぎず、きちんと造り上げられ細やかな装飾が施されたものを選んだ。柔らかい羽毛を広げ純白のシルクをその上にかぶせる。そういった作業を他者に任せるのは酷く辛いから、兄を最期まで見守り続けてくれた乳母と従者と三人で行う。メアリや他の侍女は私を止めようとしたけれど、代わることを拒否し彼の眠る場所を黙々と整えた。そして彼をそつとその船に乗せて、身内だけとつてもいいような三人で黙祷を捧げる。

最後に、彼の従者が呟いた言葉。

「何故、あなたがいなくならなければ、いけないのでしょうか」

その言葉が突き刺さる。ちらりと男を見ると、泣き出しそうな脆い瞳で恨みがまじげに私を見つめていた。それは、そうだ。乳母と従者がいなくなったあと、静かに横たわる彼の側に座り込みながら、薄く笑う。

「何故あなたがいなくならなければ、いけないの」

そうだ。同じイチエリナ王家の本筋ならば、私でもよかったのだ。別にあなたが死ぬ必要はなかった。ここまで愛され、慕われ、尊ばれたあなたが死ぬ必要なんて。ないどころか、間違ったことのように思う。

イチエリナ王家の本筋は、皆一様に短命だ。生まれてまもなく亡くなる者が多く、運良く成長したところで精精四十年程しか生きられない。それに兄はこの世に生れ落ちた瞬間、一度死んでいる。産声を上げられなかった彼はけれどどうにか生き延びて、それでもすぐにその命が事切れることすらも、よく理解していた。私も兄自身も、彼のその若すぎる寿命のことはよく分かっていた。

同じように死に神に狩られるというならば、何故彼奴は私ではなく、あなたを選んだのだ。

解っているはずだった。彼の命の制限は日に日に短くなっていることを。それでも、兄を私から、彼を従者から、慕うべき国王を国民から、奪い去った死に神は、なんて醜いだろう。

「何故、あなたが、死ななければ、いけないの」

小さく漏らしながら、静かに頬を涙が伝うのを感じた。

シクルグルの川の中流域は、一様に黒と白に染まって見えることだろう。愛された国王の葬儀なのだ。それがどんな方法であったところで人々は彼に別れを告げに来る。式が始まる一時間も前から、そこはたくさんの人でごったがえしているようだった。それを川のすぐ側に即席で作り上げたテントの中で肌を感じる。空はいつの間にかどんよりと厚い雲が覆っていた。

「シャルロット嬢。雨になったらこの川は氾濫が起きやすい。そちも解っておるだろうに。このまま施行したら下手をすれば何人が川に落ちるぞ」

「存じています。海上保安隊に出動要請を行いました。下流域付近で待機を命じております」

静かに返すと深い緑の眼をした老人は、不可解そうに私を見つめる。

「何故水葬にこだわる」

「こだわっているわけではございません。ただ、それが自然だと思っただけです」
言い終わると同時に外から声がかかる。

「殿下、サルサ老師。準備が整いました」

問答は終わりだと告げるためにも、立ち上がり彼を支えて一緒に外に出る。すぐに彼の侍女が私と代わるべく近づいてきたので、彼女に任せると老人は静かな声を私に投げた。

「一番初めの務めじゃ。しつかりとやっておいで」

振り返らなかつた。深く頷いて傘をさそうとするメアリを制し、川べりに近づいて船を浮かべる作業を真近に見る。船に蓋はされない。彼の周りには誕生花である白いガストリエが溢れていた。

ふと人々の手が目に入る。ここに来る途中の検問で、国王の葬式に参列する者に渡される同じ花は、本来船に乘せられるべきはずのものだ。船に乗り切らなかつた花は、普通認められたならば川に流される。そう、認められたならば。

私のしたことは、間違っていない。

私が現れたことに気づいたのか、川の近くからだんだんと、静寂が広まっていくのを感じる。向けられる視線は好奇と非難、不躰な蔑み。けれど、それに屈するわけにはいかなかった。

「イチェリナ国王、アルドレッド・フィリオ・イチェリナ。貴殿は聖なる英雄イエラを祖とし、彼女の純真なる意思を貫き、我らの住まう麗しき国イチェリナを護り……」

下らない矜持など不必要。そう叫びたいのを堪え、今にもあふれ出しそうな涙を必死に押さえつけながら、真つ直ぐに対岸を見つめ、決して下を、船に眠る彼を見つめることなぐ立つ。毅然としていなければいけない。何者にも屈することなく、真つ直ぐに。

その様は、貴族や民衆からなんと滑稽に映ったことだろう。愚直に碧い瞳に涙を湛え、それでも流さずに強く立とうとする姿は。なんと滑稽でもあまりにも愚かで。

けれど同時に酷く、美しく哀しい姿だった。

最初に彼女のその白い手に気づいたのは誰だろう。対岸にいた幼い子供だったのかも知れない。今となっては誰とも知れることはないが、けれど彼、または彼女が呟いた言葉によつて、「氷の姫」は裏切った信頼をわずかながら取り戻したことになる。本人はそれを熟知していたわけではないのだが。

「シャルロット様のお手、震えてらっしゃるよ」

小さな声は静寂の中響く追悼の言葉より、近くの者に明確に響いた。対岸の彼らはその言葉を聞き、同時に視線は彼女の細い手に向けられて、目は見開かれる。ぶるぶると、痛みに堪えるように強く握られた手は、彼女の心にできた傷の深さを示しているかのようにだつたからだ。

初めに行動を起こしたのは、息子を白痴として喪った若い夫婦だった。彼女の手に気づいた彼らは、静かに追悼が終わると同時に、検問の際に渡されたガストリエの花束を、川にそつと投げ入れた。

ぱしやり、と響いたその音に「氷の姫」ははっと顔を上げる。対岸にいる彼ら夫婦の顔を判別することはできなかったが、声に頬を熱い物が伝うのを感じた。

「アルドレッド陛下、万歳」

それが始まりとなつた。たくさん戸惑いが溢れる中、花を川に投げ入れる音が小さい

ながらもまるで波紋のように広がっていく。抑えていた涙など、止まるはずもなかった。毅然と立つことは止めずに、けれど静かに涙を流す幼く若い「氷の姫」のこの行いを、民衆は確かに受け入れたのだ。

追悼を読み上げていた男は、その様子にわずかに微笑みながら締めくくる。

「安らかに、お眠りください」

同時に船をその場にとどめていた紐が、ぷつりと音を立てて切れる。彼女はその小さな音を聞きつけ苦しそうに顔を歪ませ、恐らく無意識のうちに手を伸ばす。見つめていなかったはずの、兄を乗せる船に。

そして哀しい叫びを上げた。

「兄様」

アルドレット・フィリオ・イチェリナのこの美しき水葬の日のことを、人々は後にガストリエの聖流と呼ぶ。この日を境に水葬は本当の葬式の一つの手段として人々に覚えられ、そして「氷の姫」に対する認識を改めることになる。感情の伴わない冷たい少女から、イチェリナ皇国第一皇女として。

彼女が即位して最初に行ったのは、兄が亡くなったその日を聖日とすることだった。

今もシクルグルの川の下流域、恐らく彼の遺体が眠るであろう場所に、白いガストリエの花が柔らかく揺れている。忘れられることなく人々に愛されながら。

二章 マルドゥブルの花嫁

6

その話を聞いたのは本人の口からではなく、義兄からだった。

私室にドクターを招き二週に一度の検診を受ける。今日もまさにその日で、ウィルとメリがもういない兄の場を埋めるかのように立っていた。埋められるわけもないのに。そう思いながらけれど二人の優しさにわずかに心が揺れる。

「前は、何時だったかね」

「先代国王の葬の翌日です」

ウィルがそう抜け目なく答える。それを聞いてドクターはふふつとその皺だらけの顔をほころばせた。

「そうだった。あの時よく検診を受けようと思ったね。お嬢さんは少し強情過ぎる。あんな状態じゃ結果もろくに出不いと分からなかったのかい」

手厳しい言葉だ。けれどそれは彼の言うとおりなので返す言葉もないうなだれる。実際の日のことは全てに置いて私の判断ミスだった。検診から始まり、すべて。

それを勿論ウィルとメリも分かっているから、私の方をそれ見たことかと言わんばかりに見てきた。二人に散々止められたのにその日の仕事を決行したのは私の意志だったからだ。

「申し訳ありません」

「もう何度も言ったようにだけどね、お嬢さん。人は死ぬものだ。遺された者はそれを受け入れなければいけないけれど、すぐに受け入れる必要はないのだよ。ゆっくり時間をかけて飲み込めば良い。それができなければお嬢さんに王の務めは果たせないよ」

ゆつたりとしつとりと、染み込ませるようなその言葉を噛み締める。あんな判断しか下せないなら、確かに私はその日の予定をすべて放棄するべきだった。今更ながら恥じ入る。私にできること、できないこと。残された時間の残量を踏みしめながら、それを見極め物事を成さねばならない。けれどそうはいっても気ばかり急ぐ。急いても何も成しえないのはよく分かっているはずなのに。

彼は私の腕から挿していた針を慣れた手つきで引き抜き、メアリの差し出した布でわずかについた血をふき取る。

「今日の検診は終わり。これからの予定は入れているの」

「いえ、ございません」

「そう、それがいい」

メアリが間髪をいれずに答えてドクターはにっこりと微笑み、頷いた。そして私の顔を見て眉が不満げに寄っているのに気づいたのか、笑みを深める。

「不服かもしれないけれどね、お嬢さん。薬が身体中に行き届かなければ、辛い思いをするのは君なのだよ。今日はちゃんと休養日として、きちんと休みを取りなさい。また眠らなかつたのでしよう。ウイルヘルムが愚痴をこぼしていたよ」

告げ口に私はウイルを軽く睨む。彼はあわてた様に首を振った。それをドクターは楽しそうに眺め、私の腕に当てていたガーゼを剥がし処分する。そしてそのむき出しになった腕をゆっくり叩いて、子供のように私を見上げた。

「ちゃんと食べて、少しだけ運動をして、よく眠りなさい。分かったね」

「……ドクターの診察ですものね。分かりました」

「ウイルヘルム、メアリエル。ちゃんと主人の様子を確認しとくのだよ」

「勿論です、ドク」

「お任せください」

二人にまでしつかりと釘を刺すと、老人は腰を労わりながら立ち上がった。メアリがずっと彼の診察道具が入った重いバッグを軽々と持ち、彼を送るべく先に立つ。二人が立ち去るのを待っていたかのように、入れ替わりでベアードが部屋に入ってきた。

「おはようシャルロット。何でドクが君の部屋に？」

「おはようございます、義兄様。先日の話をしていたのです。ドクターは兄様の医者でもございましたから」

迷いなく返す。躊躇いもなく返した言葉はけれど嘘だ。でもそれをあなたは知る必要がない。

それを感じ取っているのだろうか、彼は更に言葉を重ねようと口を開き、けれど何も言わずに首を振った。藍色の視線は一瞬だけ私の瞳と交差される。無感情を装えただろうか。

そう思い、けれど自分が装うことなく平然と無感情でいることに気がつく。

「そう。やつと、立ち直れたみたいだね」

「ええ。少し、時間がかかりましたけれど」

答えながら彼に椅子を勧め、ウイルに紅茶を持ってくるよう合図し自分もベアードの向かいに腰を下ろす。ウイルが出て行くのを気配で確認したあと、逸らすことなく見つめている彼の瞳を見返した。

「今日はどうしたのですか」

「用事がなかったら可愛い妹に会いに来てはいけないのかな」

「ティシエ卿とご会談では？」

「何故君が僕の用事を知っているんだい」

呆れたような口調にほんの少し笑う。うっすらとあったのも分からないような薄弱な笑み。

「ティシエ卿の侍女の話を小耳に挟んだだけですわ」

「盗み聞きは淑女のする行いではないよ」

「私はまだ淑女ではございませんから。ただの小娘ですもの」

これをつこりと笑って返せたならば良かったのだけれど、私は笑うことがあまり得意ではないから静かに彼を見つめながら言う。案の定彼はその言葉に満足したようだった。

「小娘という割には成熟しているようにも思うけどね。君はもう立派な大人だ」

「立派な大人、なら私は皇女としてここには存在していません」

もしも立派な大人だと言うのなら、私はすでにこの国の王として頂点に立っていることだろう。その言葉の意味に気づいた彼は若干顔を歪めて笑った。冷たい眼差しがより凍る。冷徹な眼差し。

「あと三年、我慢すれば君は王だよ。まさか遅すぎるとも言うつもりかな」

「遅い。遅すぎます。私の準備はもうできています」

それでも、彼らは私を受け入れる準備ができていないのでしようね」

そう呟きながらすつと視線を窓のほうへ向ける。窓の向こうに暮らす数多の国民。私の愛すべき子等にして、私を認めることができる大多数。不思議だ。私は一人だけなのに彼らは何万人と存在し、ただ一人を認めることにたくさんの時間を消費する。

「受け入れないまま、終わることもある」

彼の返したその言葉の硬質的な響きに違和感を覚え、彼をきちんと見つめ返すべく視線を元に戻す、と、彼の白い指が、私の頬に触れて優しく撫ぜる。

何故……。

何故あなたがその行為を知っている。

7

私の動揺は彼に気づかれてしまったのだろうか。緊張が喉に張り付き言葉を搾り出すのが恐ろしい。それでも必死に、ほんの少し戸惑ったような声を出す。その間中彼の指は、大切なものに触れるかのようにそつと私の頬を撫ぜる。それが、酷く憎かった。

「義兄様？ どう、されたのですか」

不意にその藍色の底が近くなったと思うと、彼の顔は目の前にあった。唇が今にも触れそうなほどの距離。彼はその薄い唇から言葉を吐き出し、温かな呼吸は唇をかすめる。ぞわり、と戦慄が走る。藍色には何がある。あなたは何を映して私を見ているの。そこに浮かぶ感情は。

「君ができる、唯一の愛情表現、なんだっけ」

深い苦悶と絶叫を堪えるような、どこか狂気を孕んだ執着。

何故、それをあなたが。

その感情を向けるのは、誰。

一人しかいないだろうに私はそれを否定する。そんなことはあり得ない。断じて彼がそれを望むことなど。

「何を言ってるのさ、しゃるのですか」

静かに穏やかに返し、真近にあるベアードの唇をそっと撫でて押し返す。本能がこれ以上彼の底を見てはいけないと、警報を鳴らしていた。私は何も見ていない。いいえ、そうでなければ。

「頬を撫でるのは愛情表現の一種でしょう。メアリもよくやりますわ」
嘘だ。

けれどそうでもしなければ、もう一度彼の底にたどり着いてしまいそうだった。嫌な汗がじわりと背に浮かぶのを感じる。

彼は押し返されて離れた指先を静かに眺め、一瞬何が起こったのかわからないとでもいったげな、幼い表情を浮かべた。無垢で何も知らない子供のような眼差し。彼は、時折酷く不安定だ。酒池肉林を好む男とは思えないほど、純真無垢で何の穢れも知らない赤子のような瞳になる瞬間がある。あなたは、いったい何者なの。

ゆっくりと彼は唇に柔らかな笑みを乗せた。同時に扉をノックする音が響く。

「失礼いたします。殿下、飲み物をお持ちいたしました」

「入って」

タイミングの良さに救われる。けれど安堵したことを悟られないように、私は平然とベアードを見つめ続けた。底を覗き込まないよう細心の注意を払いながら。

「お話を戻してもよろしいですか」

「そうだね。と、いつでも、何の話をしていただっけ」

「義兄様が何故ティシエ卿とのご会談を破棄されてまで、私のところに来たか、ですわ」
「それは可愛い妹に会いたかったからでは駄目なのか」

「義兄様ったら」

思わず呆れたように声を上げる。彼もさっきまでのことが嘘のように可笑しそうに笑った。けれど空気は確かにぎこちなくそれをウィルが感づかないわけがない。美しい私の従者は卓上にティーセットを用意しつつ、そっと私に視線を送る。その意味を悟りながらも彼の眼を見返すことはない。

「何かあったのですか」

「そうだった。それだよ。とても良いことがあったのだよ」

そう彼は楽しそうに言い、長い指を組んで私の瞳を見つめる。さっきまでの深く澱んだ池ではなく、からりと晴れた青空を映すような瞳に淡い恐怖を抱く。くるくると表情を変えるのに、根本となる冷たさを隠そうともしない男。不意にあることに気づいた。

私は彼の何を知らないのだ。

「良いこと」

「そう。聞きたいだろう。人に関することなのだがね、誰だと思う？ 僕かな、君かな。それとも」

「叔母様にな？」

思わず目を見開いて彼を見返す。ベアードは目を猫のように細めてとても楽しそうに笑う。その大袈裟な様子はけれど美しい彼に酷く似合っていた。

「そうだよ。彼女はね。」

挙式するのだよ」

一瞬何を言っているのか理解できずに、思わず口を小さくあけてしまった。けれど脳は的確に彼が言ったことを捉え、再構築を始める。つまり、それは。

自分でも思っていなかったほど、明るく優しい声が出ていたことに私はしばらく気がつかなかった。

「叔母様のご結婚なさるのですね」

その表情には一点の曇りもなかったと思う。事実あそこまで嬉しそうな私の顔を見たのは初めてだと、ウイルが後で教えてくれた。それほどまでに私にとってそれは吉報だったのだから、多少取り乱しても許して欲しい。

ウイルとベアードは私の明るい声と酷く嬉しそうな顔に、驚いたように目を見張る。けれど彼らの表情が変わったのにも気づけないほど私は喜んでいた。

「それはとても良いことだわ。良かった。もうメアリは知っているのかしら」

もう式場まで決めたのだろうか。だとしたら少しだけで良いから式場の装飾に声をかけたい。脳裏にはうら若く慈愛に満ち、幸せそうなレティリアの花嫁姿が鮮明に浮かぶ。彼女はきつと白薔薇、マルドゥブルの花束が似合うだろう。

「そこまで考え彼女の夫となる人が思い浮かばないことに気づく。」

「義兄様。婿は一体どなたなのですか」

期待に満ちた目をしていただのだろうか。彼は一瞬私の瞳に息を飲み、慌てて静かに逸らす。それにほんの少し違和感を覚えたが、それよりも幸せなその話に私は少しだけ浮き上がった。

「サイラス卿だよ。彼ほどすばらしい男はいないからね」

一瞬で美しい蜂蜜色の髪をゆるく結わうレティリアと、強くくつきりとした彼女を支えるように立つ栗毛の背の高い彼を思い浮かべる。なんて素敵なのだろう。二人は寄り添いあって生きるのだと思うと、何故か胸がいつぱいになった。同時にわずかに感じる痛み。私は、決してそうはならない。

顔を上げて、ベアードがじっと私を見つめていたことに気づく。そして自分の失態に気づき、私は自分の頬がわずかに染まってくのを知覚した。恥ずかしい。

勿論彼もその反応に私が何を恥ずかしがっているか、すぐに気づいたようだった。予想以上に温かい眼差しを、けれど冷たさを隠さない視線を送られる。

「君は結婚に憧れているのだね」

今更取り繕っても無駄だ。そう思いながら私は静かに落ち着きながら、ほんの少し微笑む。笑えているのだろうか。

「そうですね。下らない、ことかもしれませんが」

「そんなことはないだろうね。結婚することはとても幸せなことだともいうし。勿論僕の母のような間違いをしなければのことだけれど」

にっこりと笑う彼の言葉には、実母に対する隠し切れない蔑みが溢れていた。彼は実母を嘲っている。何も考えずに生きる醜い彼女を、汚い物でも見るかのような眼差しを向けることもあった。それなのに決して彼女を厭わない。いや、彼女という存在を受け入れているかのようにだった。

「間違いでは、ありません。私は義兄様がいてくれることに感謝しています」

その言葉は真実。嘘の入り混じる私の言葉に少しの真実でも感じ取ってくれるだろうか。それでも知っておいて欲しい。真っ直ぐに彼の藍を見つめ、言葉をその底を射抜くように放つ。

「私は、義兄様と、兄様のおかげで、ここにいますから」

もしも兄が健康体で何の問題もない人間ならば、父は兄以外に子を生そうとはしなかっただろう。けれど現実には生まれた子供は酷く弱く。苦渋の決断の末、義兄の母と契りを結ぶ。義兄がけれども生まれなければ？ だとしたら、更に他の女と彼は契りを結んでいしたことだろう。増えるはずの後妻はけれど義兄の母以外存在せず、王族の血は三つに分かれた。本筋が二つに、トルスが一つ。

あなたが生まれなければ、私は存在しなかったも同然。だから私はあなたに精一杯の感謝を送るのだ。それが、どんな形であるかなど、あなたは知るはずもないのだろうけれど。

「君の言葉は、時々突き刺さるね」

そうふっと笑いながら義兄は吹き、静かにその身をソファに沈める。どこか疲れたような仕草は酷く妖艶に映った。その姿で何人の女を孕ませたのだろう。鋭い眼差しを送らないようにしながら、けれどわずかに自分の視線に冷たさが宿るのを感じる。

「そんなつもりはございません」

「分かっているよ。君が気にすることは何もない」

返す言葉を失わせる。優しく冷たい眼差しを真っ直ぐに受け止めながら、心中で静かに言葉は呟かれた。

あなたは、何を望んでいるの。

8

「ねえメアリ」

「はい。何でしょう、殿下」

編みこんでいた三つ編みを丁寧に解いてくれる彼女の白い手を思い浮かべながら、けれど視線は手元の本に向け背後にいる彼女に声をかける。律儀な返答にほんの少し可笑しくなった。もう十年も一緒にいるのに、私達の立場は変わらない。侍女のあなたと皇女の私。それは決して幸せな立場ではなく、彼女には侍女しか分からない悩みがあり、私には王族しか分からない悩みがあり、それは私達の溝を否が応にも強調させる。私達は相容れない。

それは耐え難い苦痛であると同時に、言いようのない解放でもあった。あなたには私かわからない。私にはあなたがわからない。それでいいのよ、だって私達は違うのだから。

分かり合うことだけが全てではない、この言葉は誰の物だったのだろう。けれど、私達の関係を表すならば、これほど正鵠を射るものは存在しない。

「知っていた？ 叔母様がご結婚なさるそうよ」

そう小さく呟く。案の定驚いたように彼女は私の髪を解く手を一瞬止めた。わずかに背後で息を呑む音を感じながら、彼女の穏やかなブラウンの瞳が大きく見開かれるのを想像する。きつと彼女は今まさにそういう顔をしているのだろう。

「初めて覗きましたわ。お相手は？」

「サイラス卿だそうよ。とても、すばらしいと思わない」

吐息を零しそうになるのを抑えながら、けれど脳裏には鮮明に美しい二人の姿が思い浮かぶ。それは彼女にも伝わったのだろうか。ブラシをかける手を止め彼女は私の白く細い髪をそうと撫ぜる。しばらくしてから彼女はまた私の髪にブラシをかけ初めた。

「これで、ようやくとサイラス卿の恋は実ったのですね」

樂しそうに漏らされた言葉に笑いがこみ上げてきた。彼女もその意味を良く知っているから可笑しそうに笑い出す。私の分まで樂しそうに笑う彼女は、私にとって大切な存在なのだ。

「思えば長いものですわね。何せ彼が十の時からもうレティリア殿下をお慕いしていたのでしよう？ 十八年、よく持ちましたわね」

「六歳の叔母様はそんなに美しかったのかしら」

「是非お二人の最初の邂逅を詳しく教えていただきたいですわ。それにしてもほんの少し意外でした」

「何が」

「レティリア殿下が二十四になるまでご結婚なさらなかったこと。殿下はいろんな殿方からのご求愛を受けておりましたから、その中から相応しい方をお選びするものだと思っております」

一瞬言葉に詰まる。けれど瞬時に切り替えて静かに彼女に言葉を返しながら、手の中の本のページを戯れにめくる。勿論読んではいなかった。

「他の侍女が言っていたのだけれど、何でも叔母様もサイラス卿を好いていたというわ」
十八年間、ずっと愛していると云われ続けその気にならない女性はいらぬのだろうか。そう思いながら彼女の反応を待つ。

「そうだったのですか。とても、美しいご夫妻になられるのが目に浮かびますわ。やはり式を挙げるのは城の裏のマルドウブルの教会でしょうか」

「そうでなければ嫌。彼女ほど白薔薇の似合う女性はいないでしょう」

女神マルフルからとられたマルドウブルという異名を持つ白薔薇。美しく聡明で気品に溢れ、けれど忘れられない棘を持つ女神を冠する美しい薔薇。白薔薇のように可憐で情熱に満ちた少女のような、けれどマルフルのように妖艶で艶やかに笑う女神のような、そんなレティリア。鮮烈なまでに美しく強い稲妻のような存在。彼女の兄であり、私の父とは根本のみが同じで全てはまるで線対称のように異なった。

時折思うのだが、何故彼女は父を殺さなかったのだろうか。それは子供のように無邪気でけれど残酷な問いだと思う。それでも私には理解できない。

彼女は兄よりも理論的で頭脳も明晰だ。それに負けん気も強く押しも強く我も強く。負けることを嫌う不遜な彼女だけれど、兄である父に対しては酷く従順だったことをかすかながら覚えていいる。そんなあの人ならば、父を殺すのは赤子の首を絞めるよりも容易いことだっただろうに。

そう自分の父を卑下しながらも私はそれ以上知ることを良しとはしなかった。彼らには彼らだけの物語があったのだろう。私には触れられない暗い炎のような物語が。

「レティリア殿下はどのようなドレスをお召しになるのでしょうか。流行に乗って白以外を選ぶのでしょうか」

「それはないと思うわ。叔母様は自分に何が似合うのかをよくご存知だもの」

「そうですわね。ドレスのデザインを一足先に見せていただきたいですわ」

「きつと彼女は見せてくれないわ。私は叔母様に嫌われているもの」

そうわずかに拗ねるような声を出しながら、本をそつとサイドテーブルに載せ彼女に促されながら立つ。渡されたシルクの寝着に腕を通し入り込んだ髪を払い、不意にこの髪が鮮血にまみれて見えて、その残像を振り払う。そういえば、と、昨年自分の誕生日を境に自分が戦場へと赴くようになったことを思い出した。

イチエリナ皇国では十五歳のことを「シエルマ」という。そのまま古代の大陸国の時に使われていた言語で、小さき大人という意味だ。そして成人である十九歳のことを「シエマ」と呼び、シエルマからシエマの間の四年間のことを「シエルマントン」と言った。

小さき大人であるシエルマの年齢からは、戦場に赴くことが許される。人と戦うこと、それは人を殺すことにもつながり、けれどそれが正式に許されるのだ。二年前、兄が成人を迎え即位したが、彼はその身体の脆弱ゆえに、戦場に向かうことをドクターから止められた。それはつまり戦場において自らの王としての力を示せないことになり、他国だけでなく民からの信頼を失うことにもつながる。だから私は彼の代わりになるべく十の時から稽古し、そしてシエルマとなった年にさまざまな戦場に向かった。昨年だけで起きた小さな諍いを含め、十は超えるだろう。イチエリナ王家に伝わる天から与えられし鎧セストを纏い、名も無き白の刀を携えて、私は兄の代理人として血にまみれて戦った。

それはけれど皇女としては酷く滑稽に映ったことだろう。兄のために白銀の刀身を閃かせ、美しい白の鎧を赤に染め上げた私は誰に言われるまでもなく滑稽で無様だった。だが、それでも私のその行いを認める者はいる。

例えば、そう。

叔母、レテイリア。

彼女は私が彼女の愛する白を赤に染めることを、酷く喜んだ。兄の代わりに成りえ、尚且つ全ての戦いを制した私を彼女はその可憐な笑顔で褒め称える。

「あなたのその行いは賞賛に値するのよ、シャルロット。いずれこの国の頂点に立つあなたがそうすることによって、民はあなたを敬愛しあなたを崇拜し、そしてあなたを恐れる。

あなたは純白で、だけれど赤に塗れ得る。あなたは、美しいわ」

いつか彼女の告げたその言葉がふと頭をかすめた。その恍惚とした美しい瞳。私の赤を邪気なく許し、あまつさえそれをより望む存在。そして何より白を愛する鮮烈な彼女。

そういう彼女はけれど私のことを嫌っている。国の頂点に立つのはあなた、そう言いながら彼女はそれでも私を憎んでいるようだった。そう、あの愚鈍な父よりも強い彼女が次の王になるのは、当たり前のことのようだった。だけれど次代、つまり先代の王となったのは、その愚鈍な男の息子。そして次はその妹。彼女だけが許された地位は、けれど彼女を呼んではいなかった。それに彼女が絶望しどれほど打ちのめされたかなど、想像するまでもない。

強く鮮烈な彼女と「氷の姫」。

私達は、けれど相容れない生き物だった。

「私は、彼女が嫌いではないのに」

叔母の結婚式が迫る夕暮れ時に、私は珍しく令嬢たちと静かなティータイムを楽しんでいた。皆、レティリアを慕う少女たちで、つまり彼女達は私の存在をあまり好しとはしていない。それを知りながら、けれど私はその場に居座っていた。

「殿下。殿下はレティリア様の式の時に、どのようなドレスをお召しになるのですか」
少女たちの間で何より大事なそこだった。それもそうだろう、叔母と同じ仕立屋を愛用し、けれどいつも着ているのは二人ともまるつきり正反対のドレスを着ているのだから。

「やはりフィルツシェ様のドレスですか？」

「そうなるのでしょうか。あなたがたはどのようなものをお召しに？」

カップを卓上に乗せ私の目の前に座る、マリエッタ・モネイル・ハルドウワを見つめた。桃色の豊かな巻き髪を二つに結び、豪華な扇で口元を隠す様は年下の少女ながら、甘く妖艶で酷く魅惑的な女を感じさせる。叔母の一番のお気に入り娘であり、「桃(モネイル)」とそう呼ばれていた。彼女は一番叔母に近いところにながら、けれど私のことをあからさまに嫌悪しない不思議な人物で、だからいつも彼女がいるとその存在が気になってしまふのだ。

彼女はその甘い糖蜜の瞳をふつと緩ませて、やわらかい声音を出す。

「私にそれをお聞きになるので、シャルロット殿下」

それもそうだ。彼女はその通り名に恥じないように、いつも麗しい桃の香りを纏わせ、そして紅や桃のドレスを身につける。私こそが美しい桃。そう主張するようなドレスに、私は少なからず感心していた。まだシェルマにも手が届いていないあどけない少女であるはずなのに、既に桃であるという自我が完璧に存在しているのだ。それは、十四の少女にしてはかなり早熟で、そして素晴らしい。

「桃のドレスを？」

「ええ。フィルツシェ様とは比べ物にはなりません、素晴らしい仕立屋に出会いましたの。早くそのドレスを着てレティリア殿下の式に出席したいものですわ」

本来シェルマではない彼女は結婚式に出席することを許されていないのだが、彼女の父であるハルドウワ侯爵が足の悪い自分の代わりに娘を出席させるということになったのは、もう城の中の者ならば誰もが知っていることだった。勿論今の場にいるシェルマに満たしていない、また、満たしていても親が出席する少女たちがいるのに、である。彼女のそれは挑発のようであり、けれどただ誇りに思っているようでもあり私にはその真意が掴めない。彼女のような存在を、まさに「女」と言うのだろう。

「本当にうらやましいわ、マリエッタ。私も是非参加したいわ」

「私だって出席させていただきたいわ。それに折角のマリエッタのそのドレス、もう着る機会などないのでしょうか？」

「それは残念だわ。もう着るつもりはないの？」

少女たちは次から次へとその細い喉を震わせて、賑やかな小鳥のように声を上げる。それは酷く不思議な光景に見えた。甘い餌が落ちてくるのを待っている雛のような少女たち。そして、甘い餌を送る立場になる、「桃」。

「いつか舞踏会があったら着てみようかしら。」

ねえ、シャルロット殿下。あなたは仮面舞踏会に興味がありませんの？」

桃色の少女は甘やかな声を上げて私を真っ直ぐに見つめてきた。不意をつかれて一瞬何を言われたのか分からずに、私はわずかに眉をひそめる。

「仮面舞踏会、ね」

言葉が形になって脳に字が映し出される。その名の通り仮面をつけ自らを偽り、逢瀬のために開かれる愛しくも低俗なその集い。参加したこともなければ一切の興味も抱かなかった。

そしてその話題を私に振るといところで、既に彼女の強さが分かることだろう。何の迷いもない糖蜜の瞳には、挑発とからかうような色が窺える。迷いなく、挑発する、侯爵令嬢。

面白い少女だ。

「残念ながら、興味はないわ。この髪だといくら偽ったところで気づかれてしまうもの」

「あなたが興味がないのは舞踏会自体ではなくて、男性という対象でしょうか、シャルロット殿下？」

毒の含まれたその言葉に、私は一度目を閉じた。

案の定周りの少女たちは彼女のその問題発言に顔を青ざめさせ、メアリが冷たい眼差しで彼女達を見つめ、私の護衛をしてくれているガレス卿とそしてウィルが少女たちに剣を突きつけていた。

「止めなさいガレス卿、ウィル。何をなさっているのです」

平然とした声を上げて、私は彼らの剣を無理矢理下ろさせた。ウィルはその翠の瞳を冷酷に歪め、ガレスはいらだたしように剣を下ろす。

その中で、剣を突きつけられたマリエッタは、わずかに怯えたように、けれど決してその怯えを見せないように毅然とした眼差しを私に送っていた。その気高さにやはり、侮辱された身でありながら感動を覚える。それでも彼女の糖蜜色の瞳は、恐怖にくつきりと彩られていた。震える唇を、叱咤するように無理矢理動かし、言葉をつむぐ。

「も、うし、訳ありません、殿下」

「下らないことに時間を費やしてしまったようね」

そう返し、メアリにローブを手渡してもらいながら暇を告げる。

「それでは、お先に」

10

廊下に出ると付き従っていたメアリが不愉快そうに眉をひそめて、静かな声で吐き捨てた。その様は、私に似ているようで、だけれど仄かに香るあの女の。

「低俗な」

赤い髪の幼く少女らしい彼女のその顔で、そう吐き捨てるのは酷く可笑しかった。彼女にそんな言葉は似合わない。それでもその言葉の意味は明らかに私を庇おうとする意図のものだから、私もあまり強く窘めることはできない。これが甘えだとは分かっているのだが。

「殿下、何故彼女たちを咎めないのですか」

不意に背後からそう声が飛んできて、私はそれにひきつけられるように振り替える。そこには不快そうな顔をしたガレスが立っていた。腰の剣と右肩にかかる布章は、騎士の証

として誇らしげに垂れる。

「ガレス卿」

「貴殿は彼女たちに甘いようにお見受けいたします。詮無きこととは存じますが、一度レティリア殿下とお話なされてはいかがでしょうか」

「それこそ詮無きこと」

淡泊にそう返しながら執務室に向かうために前を向こうとすると、すっと腕を掴まれた。振り返るとガレスがその青の瞳を揺らしながら、私の手を恭しく捧げ持つ。それがあまりにも滑稽で、私はわずかに顔を歪めた。何故、私を求めるの。

「申し訳ありません。けれどお答えしていただきたい。何故貴殿は」

何故あなたは誰も求めないの。

いつか、誰かにも尋ねられた言葉だった。それはそう、遙か昔の遠い夢のような夏の日。あなたは翠の瞳をただまっすぐに私に向けていったのだ。

震えそうになる喉を叱咤して私は穏やかに彼の言葉を遮った。私があなたに与えることができるのは純白の冷徹な眼差しだけだと、知っているのでしょう。そう憐憫を込めた声で。

「ガレス卿。私はこれから執務がございます。その話はまたの機会でよろしいでしょうか」完璧なまでの拒絶の声に、彼は毒気を抜かれたように言い募ろうとしていた言葉を落とすことなく静かに目をつむり、そして私の指先に唇を落とした。

「失礼、いたしました」

「では、また」

彼の手が離されると同時に私は迷いなくその場を立ち去る。それでも彼の口が告げようとした言葉は、確かに私の中に消えることなく留まっていた。

何故貴殿は、婚約者を選ばないのですか。

誰もが一度は行った問答のそれを、私ほど多く繰り返された皇女など存在しなかったに違いない。飽きるほどに、意味すら知らない幼子であったときから、その言葉は既に何度にも私に降りかかってきていたのだ。

婚約者の存在しない異例な皇女。

あんなにも生命の危険を唱えられていた兄ですら婚約者が存在したのに、私の婚約者についてはシエルマになっても決められることはない。その権利は父だけのものとして、私が誰の命を受けても婚約者を作らない。それは彼女との取り決めで決められたことだ。だから本来婚約者を決めるシエルマになるまでの年、たくさんの求愛をすげなく断り続けた。十になるまでは父が、シエルマになるまでは若い兄に代わって叔母が、そしてシエルマになつてからは、私自身が全ての誘いを断り続けていた。

私は何かに執着を覚えてはいけない、それを悟ったのはいつのことだろう。それから私は全てに執着を覚えなないように、何かを愛しすぎないように、ただそれだけを念じて生きてきた。否、生きようとそう望んだのだ。

それでも、どうしても。

「殿下。どうなさいましたか？」

柔らかな声が耳朶を打つ。隣に立つ彼を見上げると、彼は静かなその翠の瞳に淡い不安を滲ませた眼差しを私に向けていた。それを受け止めながら、そっと首を振る。

「いよいよ、来週なのね」

思わず漏れたのはレテリアの結婚式のことだった。手に持っていた書類を机の上に置いて、差し出されたカップを受け取り温かな紅茶を飲む。ふわりと紅茶の優しい香りが鼻腔をくすぐり、それにどこか和みながら蜂蜜色の髪の毛の彼女を思い浮かべる。

唯一人愛していたのだという男と結ばれる彼女と、何十もの愛を拒絶する異例の私。何が違うか、などと問うまでもなくそれは明らかだった。私は誰も愛さない。冷たく凍り付いていなければいけない。何者にも絆されることなく許されないうまままで。

そうでなければ、そう在るように自ら望まなければ、私は愚かなまでどう生きればいいのか分からないから。

「少し、安堵なさっているようですね」

ウィルの声にわずかに頷く。安堵、というよりも収まるところに収まったような安定を感じていた。びたりと全てのピースが当てはまり、あとは全てを壊すその掌を待っただけ。

「安堵、というより、落ち着いたように思っているだけよ。収まった」

まとまりよく、間違えることなくきちんと収まる。本来王族が結婚できる相手は、左翼のユーフェスニア公爵家か右翼のテルディモア公爵家、そして代々王の婚約者となる者の多いサイラス公爵家の三公だけだ。叔母の婚約者であるサイラス卿は、言うまでもなくサイラス公爵家本家の嫡男である。

恐らくそれは人々からすれば珍妙なこと映つただろう。次代国王が決定している私は一切恋愛沙汰に名前が載らず、そして婚約者がシエルマを一年過ぎた今になっても存在しない。対して何の地位も約束されていない叔母は求愛をすげなく断るといふシーンを目撃され、ついに来週婚約者を輩出するサイラス公爵家の嫡子と挙式を上げるのだ。更にそれに輪をかけるように私と彼女は犬猿の仲だったこともあり、私達は対極の存在として知られているように思う。

誰とも愛を交わすことのない「氷の姫」と、王の婚約者と恋愛結婚をする慈愛に満ちた女。

愛のない私と愛のある彼女。

だからガレスの言い分を私は受け入れるわけにはいかない。マリエッタの言葉は私の行動を客観的に捉えたものだ。それならばあのような言葉になってしまうことも分からなくもない。

物思いに耽っていることに気づいたウィルは、不意に私のカップを包む手を更にその上から重ねた。わずかに驚き顔を上げると、翠の瞳がそこには在る。

ずっとずっと昔から、私の側にあつた彼のそれ。

疼く感情は何だろう。知ってはいけないことだと培われてきた理性が、思考を無理矢理に押しとどめその痛みを忘れさせる。否、忘れさせようと、する。

「ずっと持っていては疲れてしまいます」

彼のその目を見つめっていると、彼は極自然な口調でそう囁いて伏目がちに私の手からティーカップを抜き取った。すり抜ける温かさ収まる冷たい空気。不意に先月私に全てを遺して去った兄の冷たい手が、私の頬を撫でたような気がしてはっとした。その様子に気づいた目の前の彼は、怪訝そうに首をかしげる。

「いかがでしたか？」

「何でもない、わ」

静かに首を振る。もう一度、淹れて貰った紅茶を一口含む。柔らかな甘い口当たり、彼の好む紅茶を淹れたのだとすぐに気づいた。ウィルは幼いときから私と一緒にあって、甘いものが好きだったのだ。

「今日の仕事はこれで終わりかしら」

もう、関係のないことだけれど。

そう内心で呟きながら紅茶をそっと上から覗く。自分の冷たい碧眼が貫くように見つめ返してきていた。

「そうなります」

ふっ、と液体の表面が穏かに揺れて、波が生まれた。

11

そして、白薔薇の結婚式当日。

編みこまれた蜂蜜色の髪に添えられた白薔薇、白い顔を優美に魅せる純白のベール。細い首筋には鮮血のような大きな赤いルビーが、まるで打ちとめるかのように存在を主張し、白い肌をなお雪のように輝かせていた。その碧眼は愛しそうにその目を迎えたことの喜びを湛え、わずかに潤ませながら隣に立つ夫にだけに向かっている。それはまた、男も同じ。

イチエリナ王家の結婚式は、城の裏の小さな教会で行われるのが常だ。その中で眠るイセラ・イチエリナの墓標の前で二人は愛を誓う。

レテイリアとサイラスはそれぞれの親族に見守られながら、まるで惹かれあうように唇を重ねそして誓いの言葉を述べた。美しい叔母の瞳からすうっと涙がこぼれて頬を伝う。それはさながら尊い生命が生れ落ちた瞬間のような歓喜と幸福のようで、それを見つめてしまったことにうろたえる。私がここにいることが、酷く不自然に思えた。

正式な式を終えあとは新郎新婦が、教会に入れない参列者に礼を言いに行くだけの時点になって、私は部屋に戻ろうとドレスを翻す。この柔らかな優しい空間に在り続けられる自信がなかった。こんなにも幸せなその空気に、醜い嫉妬が溢れそう。

私は、誰とも結婚することがなく、誰からも疎まれて、そして。

「シャルロット」

優しい鈴の音のような声が耳朶を打ち、はっと夢想から我に返り呼ばれたほうに振り向くと主賓である叔母が、華やかな笑顔を浮かべて立っていた。隣には夫はいない。それでも彼女のその幸福そうな笑顔に、私は沸き起こりそうになっていた嫉妬が砂のように崩れていくのを感じた。

「レテイリア殿下。とても、素晴らしい式でした」

穏やかな声が喉からこぼれ出た。そこには優しい安堵と羨望、ただそれだけ。

「当たり前よ。ソフィアの手伝いがあったのだから」

それに

胸を張って傲慢な少女のように彼女は笑った。

「この私の結婚式なのよ？ 素晴らしいわががないじゃない」

迷いのない彼女の口調に私は心からの安堵を覚えた。彼女は大丈夫。きっとこの日乗り切れる。

不意に彼女の碧眼が私の眼差しを捉えた。息をするのさえ辛くなるような雁字搦めの瞳。探るようなそれは私にだけ感情を伝えるべく真っ直ぐに想いを乗せていた。それは。

「そうでしたわね。叔母様、マリエツタがお待ちしていますわ」

先ほどから糖蜜色の視線が絡みつくようでわずかにいらだたしかった。その二つの視線から逃れるためにそう彼女に告げると、レティリアは心友であるソフィアという人が選んだ白薔薇のブーケを、私の手に無理矢理押し込める。

「え、あの」

押し付けられた純白の薔薇に戸惑う。まさかこれを私に渡すとは思っていなかったのだ。普通ブーケは何より親しい存在や近しいものに、感謝と相手の幸せを願って贈られる。案の定絡みつくような視線が鋭さを増した気がした。

「あなたのものよ。ソフィアから私に、私からあなたに。ね」

囁くように彼女はそう私の耳元に言葉を残してから、愛する夫を捕まえてマリエツタの元に歩いていった。彼女の視線はすぐに霧散し、私は白薔薇のブーケを持ったまま、少しだけ惑う。

顔を上げると目の前にウィルが立っていた。王族でも親族でもない彼は教会に入ることを見張る。を許されていない。その間外で待っていたようだ。私の手の中にある白薔薇のブーケに目を見張る。

「殿下が？」

「ええ」

呆然とした声になっていたことに気づいて、少しだけそんな自分に驚く。レティリアの行為は、何を示しているのだろう。

考えても仕方のないことを思い、わずかに苦笑して歩き出す。

「どちらへ」

「部屋に。何かあったら伝えに来て」

「かしこまりました」

この温かい空気に氷は似つかない。自分がどろどろと溶け出してしまいうので、すぐにあの冷たい部屋へと戻りたかった。

部屋は静かで冷たい空気を湛えていた。そんな中、羊皮紙に物を書く音だけが響く。白い髪の少女がドレスから部屋着に着替えて机に向かっていた。

机の上に蠟燭はない。既に夜になった窓の外の月明かりだけで、黙々と文字をつづる。

窓枠にはレティリアの結婚式に使われた白薔薇のブーケが、そのまま花瓶に飾られていた。月光に照らされた花はまるで死者のように白く、けれど聖女のようにわずかに輝いて。

それを横目で見ながら、少女はその深海の瞳に何らかの強い感情を抱いて、言葉を綴る。

（お久しぶりです。ご機嫌いかがでしょうか。）

レティリア叔母の結婚式にご出席なされていましたね。彼女の白薔薇はとても美しいとお思いになりませんか？ 何でも彼女と寄り添うサイラス家嫡子は十八年間想いを募らせていたとか。とても愛しい二人でした。

そういえばレティリア叔母は私に白薔薇のブーケを下さったのですが、少しだけ申し訳ないように思っています。これは私が受け取るべきではなく、彼女を慕う人に差し上げる

ものだと思っていましたから、驚きました。

白薔薇の似合う彼女に憧れを抱かずにはいられません。私は恐らく生涯誰とも寄り添うことなく死ぬのでしようけれど、それでも彼女のあの笑顔をうらやましいと思わずにはいられませんでした。それも許されないことなのかもしれないのですが。

彼女のあの笑顔。

あなたはご存じないでしょうが、彼女の頬には涙のあとがありました。唇は優しい弧を描き、瞳はわずかに潤みどうしようもない幸せを湛えていらっしやった。

……少しだけ、感傷的になっているのかもしれないかもしれません。お許しください。

私は彼女がうらやましい。

正直に言ってしまうえば、きっとそういうことなのでしょうね。

とても素晴らしい式でした。白薔薇のブーケは窓の花瓶に挿しております。どうぞすぐ枯らしてしまうのでしようけれど。あなたに失礼ですね。ごめんなさい。

あなたに良い日々が待っていますように)

短いけれど書きたいことは書けたのだろうか。少女はそつと筆を下ろし、視線をはつきりと白薔薇に向けた。開けたれた窓から冷たい夜の匂いが優しく流れ込む。それに白薔薇は、幸せそうにわずかにその身を揺らした。

少女の深海の瞳が、柔らかく、泣き出しそうに歪む。

それを知らずに、月は夜に滲んでいった。